

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

| | |
|------------|---|
| Title | 老子の文章を評す（承前）：論説 |
| Author(s) | 内田，周平 |
| Citation | 龍南會雜誌， 39： 4 - 8 |
| Issue date | 1895-10-16 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/4627 |
| Right | |

論 說

老子の文章を評す (承前) 教授 内田周平

文章には達意と修辭との二途あり、而して二者毎に相須つものなり、先秦の古文は此處一致して未だ著しく分岐せず、されども亦其人の性分に従ひ各々主とする所なきに非ず、孟子、韓非の如きは達意を主とするものなり、左氏、楚辭の如きは修辭を主とする者なり、老子の文は固より達意の部類なれどもその中に自然修辭の法も存し居るなり、達意は譬へば力士の如き、その勝負を決するは、力量の多寡に在ることなり、修辭は譬へば俳優の如し、その優劣を定むるは、聲貌の巧拙に在ることなり、人或は古人の文を作るに専ら達意を主とし、初めより意匠を用ゐずといふ者あれども、是れ然らず、古人の文と雖も達意中に多少意匠を用ゐて、點綴せしことは掩ふべからず、余が老子を讀むの際、わが審美眼に映せし聲貌の尤も特異なるものを擧ぐれば大略左の如し、

一 渾○喻○を○造○出○せ○し○こ○と

渾喻とは西洋の修辭學に云ふ所の「メタフェル」、宋の陳騭が云ふ所の簡喻にして、我邦にてこれを一字の喻と謂ふ、(されど必ずしも一字に限らず)これ譬喻の一種にして「如し」「似たり」等の文字を用ゐず、他の肖似物を即用して自己に代ゆるものとす、例へば「彼れは獅子の如く聞へり」といへば通常の譬喻なれども、「彼れは戰場に於ける獅子あり」といへば渾喻なり、鬚髮如雲顔如花といへば通常の譬喻なれども、雲鬚花顔といへば渾喻なり、「尾花は人を招くに似たり」といへば通常の譬喻なれど

も「尾花が袖」といへば渾喻なり、「その他武士の手本、婦人の鑑、勉強は立身の基、大學は入徳の門、石炭は文明の母、哲學は諸學の王」といふ、手本、かゝみ、基門、母、王の字みな渾喻なり、元來渾喻は意味を含蓄して文氣を深穩ならしむるものなれば、之を製作するにその品類を擇びて善く使用すること肝要なり、今老子が造出せし者を見るに、その文字は甚だ新奇ならずと雖も、その意味は極めて高大に、極めて幽奥に、又極めて緊切なりとす、茲にその例若干を學示すべし

無名萬物之母第一章玄之又玄、衆妙之門同上天地不仁、以萬物爲芻狗第五章谷神不死、是爲玄牝、玄牝之門、是爲天地根第六章專氣致柔、能嬰兒乎、天門開闢、能爲雌乎、同上貴求食於母第二十章重爲輕根、靜爲躁君第二十六章知其雄、守其雌、爲天下谿第二十八章知其榮、守其辱、爲天下谷同上天下之交、天下之牝第六十一章道者萬物之奧、善人之寶第六十二章江海所以能爲百谷王第六十六章天網恢恢、疎而不失第七十三章有德司契、無德司徹第七十九章

中に就き玄牝、芻狗の如きは造語殊に奇創なりとす、

二押韻の文句多きこと

支那の修辭學の祖ともいふべき梁の劉彦和は、音韻の調はざるものを文家の吃といへり、音調の文章に缺ぐべからざる知るべし、音韻はよく節奏を明亮にするものなれば、凡べて韻を押したる言辭は人に感觸すること特に強きものなり、古書の中易と老子とは尤も押韻の語多し、而えて老子には短きは兩三句、長きは十餘句に及び、或は一章全く押韻を以て成るものあり、而して又その押韻に一韻あり、換韻あり、一字韻到底あり、即ち左の例を見て知るべし

常無欲以觀其妙、常有欲以觀其徼嘯

玄之又玄、衆妙之門。先元通韻

此れ第一章の中にある肝要の語なり、故に押韻もて人に記憶し易からしむ、この他肝要の語は大概韻を押すに似たり、

有無相生、難易相成、長短相形、高下相傾。庚

これ四句一韻にして對仗も亦極めて整齊なり

天地不仁、以萬物爲芻狗、聖人不仁、以百姓爲芻狗、天地之間、其猶橐籥乎、虛而不屈、動而愈出。實物通韻

多言數窮、不如守中。東

此れを第五章の全文となす、初めの四句芻狗の喩を連用す、妙甚え、且つ芻狗の二字は疊韻なり、次に天地の二字首句を承けて橐籥の喩は妙更に甚し、而してこの二字も亦疊韻、屈出の二字橐籥を承けて天道を説き、一轉韻を換えて窮中の二句に人事を説き出す、夷の思ふ所に匪ず、

谷神不死、是謂玄牝。牝讀如七玄牝之門、是爲天地根、綿々若存、用之不動。元眞通韻

これ第六章の全文にして、五千言中の主腦文字なり、故に毎句押韻、首の二句谷神、玄牝の名を掲出し、第三句以下韻を換えてその功用を説く

視之不見、名曰夷、聽之不聞、名曰希、搏之不得、名曰微、微此三者不可致詰、故混而爲一。質

第十四章の首にあり、第十六章と同じく道体を形容す、換韻の法も亦略ぼ同じ

有物混成、先天地生。庚

人法地、地法天、天法道、道法自然。先

前者は二十五章の首にあり、後者はその尾にあり、用韻の法、前は連句押韻にして、後は隔句押韻なり

大道廢有仁義、智慧出有大偽、眞

見素抱樸、少私寡欲、沃覺通韻

前者は第十八章の首に出で、壁頭熱罵するもの、後者は第十九章の尾に出で、悠然冷収するもの

唯之與阿、相去幾何、歌善之與惡、相去何若、龔

この語二十章に見ゆ、毎句押韻にして前二句は平を用ひ、後二句は仄を用ふ、兩之與の字悠揚追らず、恣態曩々、謠の如く諺の如し

師之所處、荊棘生焉、大軍之後、必有凶年、先

この語三十章に見ゆ、隔句押韻にして前二句は處を以て言ひ、後二句は時を以て云ふ、師軍の二字用ひ得て別あり、文氣疎濶に似て、意趣は却て嚴密なり

善建者不拔、善抱者不脫、子孫祭祀不輟、曷屠通韻

罪莫大于可欲、禍莫大于不知足、咎莫大于欲得、屋沃通韻

同一の句法、同一の韻法、前は五十四章に出て、後は四十七章に出づ

載營魄抱一、能無離乎、專氣致柔能嬰兒乎、滌除玄覽、能無疵乎、愛民治國、能無爲乎、天門開闔、能爲雌乎、明白四達、能無知乎、支

豫兮若冬涉川、猶兮若界四隣、元信通韻儼兮其若客、渙兮若水之將釋、孰兮其若僕、曠兮其若谷、渾兮其若

濁、陌屋通韻

前は十章に出づるもの、隔押にして一韻なり、後は十五章に出づるもの、連押にして換韻なり、或は乎字を連用し、或は兮字を連用し、穆遠蕩漾、楚賦を讀むに似たり、

知其白、守其黑、爲天下式、爲天下式、常德不忒、復歸于無極、知其榮、守其辱、爲天下谷、爲天下谷、常德乃足、復歸于樸。通韻

これ一韻到底のもの、二十八章にあり

天得一以清、地得一以寧、神得一以靈、谷得一以盈、萬物得一以生、侯王得一以爲天下正。庚

天無以清、將恐裂、地無以寧、將恐發、神無以靈、將恐歇、谷無以盈、將恐竭、萬物無以生、將恐滅、侯王無以正而貴高、將恐蹙。通韻

語法韻法共に一正一反、三十九章に於て之を見る、前に平韻を用ひ字々平和、後に反韻を用ひ字々仄險、

上德不德、是以有德、下德不失德、是以無德。職

此れ一字韻到底のもの、三十八章の首にあり

知不知上、不知知病、夫唯病病、是以不病、聖人不病、以其病病、是以不病。敬

此れ亦一字韻到底のもの、七十一章の全文となす、全文二十八字中に病字を用うるもの八、重複して姿を取る「なせばなる、なさねばならぬ、なるものを、ならぬはれのが、なさぬなりけり」と同調、作者巧を弄ぶ處こゝに至りて掩ふべからず。
(未完)

文學上に於ける現時の國家主義

楳村學人

理想を踏臺とするは文學なり。現實を基礎とするは國家なり。文學は社會に生れて、社會に超逸し。國